

源氏物語講義 首卷



黒川真頼大人校閱  
鈴木弘恭大人講義

源氏物語講義

東京 柳河氏藏板

源氏物語講義序

新元弘恭ぬのひさせとるのあは  
乃かつせちせのあはせとるのあは  
きくゝあ人あはせとるのあはせとるのあは  
源氏物語講義とるのあはせとるのあは  
乃かつせちせのあはせとるのあは

源氏物語講義

黒川真頼序

あそびに〜  
たのむもせむいふに  
巻をいそよふしに  
とほろめしむるを

元禄十七年五月

三川若水

結す

又書さるるを、可成り斗ふこと、  
のまはれに、  
さるもの、  
しるす若し、  
百人の橋、  
のあはれ、  
もあせむ、  
てあせむ

いさよは川となく屋の口ははらばらと  
危なはしき程を講ずるの如く笑つるものぞ。  
中にも女子講を我乃者も祀りあはれ  
其の前後したるも何事づくたさく愛見  
酒説ともあなるの程をうらびみず人さ  
るるのありおる程をわの

源氏物語十巻

弘木弘恭

此物語も文法に於  
てハ御も難き所  
なきやうなれどもか  
くハものしつるを  
抑も文法のみならず  
ことども和漢ともお  
外のこととして宋の  
王安石といふ人蘇  
東坡の醉白堂記とい  
ふ文章を足しとき  
戯れていそぐ文辞多  
くみるやといへども  
然もこれれ醉白  
堂はあつたといふれ  
いハ安石の文章を福  
らふもその体制を  
先よして文の巧拙  
を後よするの故に  
まべて文章も意を  
達するが本よ巧

源氏物語講義

東京 鈴木弘恭 講義

伊勢 小串隆 筆記

心得

此物語の巻でもきこころハ先くの人々のもや  
くより論らひ置けバ今さうよ云までもなけ  
れども巻の數いと大部なるを以て初學のと  
もあつたよくも味をもほして人まよまたらめ  
でたしとのこもてちやほもある或ハ淫奔よ  
くされるるどいひ志をぞけてやくるまぬ

源氏物語講義

あつた

拙のさよハ末なり  
といへども名文と  
いふべきほどの文  
章も自然よ本末具  
つりておのつら  
巧みよして然く其  
意を達せり此物語  
の如きも即ち是な  
りさて難者ハ先  
べき処をおきてた  
て淫奔といふをも  
てかむのりの文を  
とらざるもいと  
とらざるもいと  
あはざるもあはれ  
も淫奔よあはれ  
とよハあはれども  
このことハ師の説  
のめく式部ハ上東  
門院のみ心よま

とのくも何れども。作者の意を志すぬ  
あはれのことよて。いと口惜しきことざる也。おの  
き思ふよ。作者をもとよめられをりて人を教  
訓せんとのさよハあはれ。たゞ當時の君臣父  
子夫婦兄弟朋友の情態を。志のもおぼめをし  
てかきあはれ。たるものともゆれだ。をやくよ  
りられを諷諭のさよてかきしるるべし。など  
いふ説も又延多也。紫家七論、源氏物語評叙  
さて一口よいへむ。大よしてハ當時の世態風  
俗をよくうつし。小よしてハ男女の閨情をも

一 号 一

せて何の世よあも  
しろきことともうれ  
と思ふものか。猶  
人情よあはれいな  
とおもひおこして  
かゝれつるは物語  
るれを足ん人さる  
心して味ふべきぬ  
とよハ非はして、よ  
の年よのき男女  
ら水を盥として研  
うへりみるもこと  
あれは。と誠しめ  
し運筆のさよハお  
のつらう足延たり  
猶評叙よもいれ  
たるをえる也。い  
病癖

あけてむねと時運の盛衰をさとし。人世の榮  
枯を志めして。一向世態ようとき人のくろ  
よも。そごろよ身よしむむのりほくをなされ  
て。あの董狐の筆ともいふべきさまよ。何のを  
ぶある処もさる。かゝれ。ことともなくかゝれた  
るハ。いと知傳たき運筆といふべし。されを文  
法なども。おのつらう備をりてふしき哉。その  
ことよいつりてハ。縣居翁の新釈。廣道の評叙。  
二三の書よ。いさうあづ。論らへる外よ。い  
ま。これに詳ら。のよ説示免されたるものを

源氏物語講義

あはれ

二

いふことあり、是も人々のあつたうなる筆癖のことなり、文を閲するよ、心得てあるべきことなり、紫式部の紫式部、清少納言の清少納言、伊勢の伊勢の癖あり、能くみて見るべし、漢文もあはれ、こゝして、魏叔子文話云、学、子厚、易、失之、平、学、東坡、易、失之、衍、学、子固、易、失之、滯、学、介甫、易、失之、枯、学、子由、易、失之、蔓、惟、学、昌黎、老泉、少病、然、昌黎、易、失之、生、梗、老泉、易、失之、粗、豪、終、愈、于、他家

何らざるなき。あられ年以あぬことと思へ。今、講義のついでに、例の眼目照應抑揚頓挫冒頭などの名目を付けて、仔細に段節を區別し、初学のともがらうも一目瞭然たる志を思ふ。あはれものう。学するは臆説も多うる。三回をのりて、通讀して書を閲するよ。少くとも三回をのりて、通讀せざれど、全篇の意を了解し、ごときものなき。さるハ一讀して行文の体裁作者の旨意一篇の字眼綱目要領大段を探り、再讀して照應喚

一 号 二

也、とあるこの病癖、いふの文章家よりあること、あられ別、修らひあけり。

名家の文章も、皆多、少、修、し、紫式部の才筆といへども、此物、修、も、多、少、修、し、た、多、と、疑、ひ、多、し、さ、る、の、ま、り、と、い、う、で、は、長、大、の、文、を、か、ま、り、を、修、し、く、あ、ま、り、な、り、ま、の、若、花、の、あ、ま、り、の、ま、り、と、い、う、の、ま、り、と、い、う、種、ふ、を、原、と、し、て、よ、く、見、る、人、の、心、を、動

呼對句伏案伏線及び小段を知り。三讀して一言一句一章と潜心玩味せば。抑揚頓挫緩急波瀾など。あられづらう。知らう。あられ。と。古人のいふれたるが如し。されど。或は全部五十分巻より距りて。初学の事通讀するさへ。容易なら。バ。その巻數を減らさんとして。あられ。今。回を本文の講義を省略し。専ら文法を細く。よ。説。う。んと。は。さ。れ。ど。本。文。ル。諸。注。ニ。漏。れ。た。る。と。ら。れ。ぐ。ち。を。詳。ら。う。と。あ。れ。づ。さ。る。文。法。の。こ。と。は。為。章。が。七。端。ニ。全。篇。を。富。貴

源氏物語講義

あられ

三

あゝ感ぜどもむや  
うよかきさるるれ  
るをいともいとも  
文ををけり、宋の朱  
晦庵といふ人の説  
は、政陽修の文章も  
俚にして、その妙所  
に到るるが多し、其  
を或人醉翁亭記の  
草稿を買得たるを  
見し、冒頭滁洲四  
面有山云々、凡數十  
字あり、今本ハ環滁  
皆山也の五字のみ  
修し、かく修し、かく  
改めし、さるるべしと  
いふれ、さるる物修り  
極め、省筆多し、よ  
く修し、さるると、注  
意して見るべし。

温潤の氣象にして。官家の文章なるれども。中々  
山林出生あり。市井田家あり。貧困哀傷あり。閨  
情風景ハ。巻ごとく見匠て。情を写し。景を形と  
ること。その所を人よ向ひ。そのよ遊ぶが如  
し。全體ハ傳し。又自ら序作あり。跋あり。記  
あり。論あり。書ありて。諸体備をれり。といわれ  
しを。いれり。多し。とぞおぼゆる。廣道ハ評釈ハ  
比物語を。先つ一部ハ距り。一部ハ法則あり。  
一卷ごとく。一卷の法則あり。一段ハ一段の法  
則あり。一章毎ハ法則あり。一句ごとくハ法則あ

一  
号  
三

参考

近頃近藤芳樹翁も、  
源氏奥書を著して、  
よめ人の、比物語の  
深さをあらわし、たゞ  
その文辭をのぞく  
で、は、好むの媒  
さど思ふも、過ちな  
ることを痛らひ、  
夏又式部お來りて  
物語をさるるを  
たり、参考のめ  
概略を左に抄録し、  
奥書云々、いれり、源  
氏の君と、攝家の嫡  
子頭中將と、然るに  
して、中將が源氏  
仕ふるハ、主従のめ  
きさ、まよつて、そ  
れより、次才の昇進

耳。いさゝか此末の傳。あやまきまで法則あり。  
といわれし。い。志ひて編るるやうなれど。史  
づ新釈ハ縣居翁がいちり。めく。文法たゞ  
き文とを知られたる。先哲のうち。是を史  
記の文法ハ則ち。い。説ハあれど。廣道  
の説のめく。うけが。い。い。なれ。史記ハ  
歴史なる。比文も物語なる。布邦も歴史ハ歴史  
の辭あり。も志。比文を。い。國史のめく。歴史  
の辭。い。い。め。名文とい。い。い。斯く  
は。末の閨情も。傳も。悉く網羅して。讀者をして

源氏物語講義

あゝ後





日本紀の御局と稱  
せしとの帝のかく  
のたまふるハ、日本  
紀ハ神代より起りて持  
統天皇よりおれる、そ  
の間數十代朝威盛  
るを、皇族の  
著く諸臣卑しく上  
下のか正しうを  
よ、奈良の御代以來  
漸く攝籙の勢ひ強  
くなを、皇族のい  
く衰へたるを、武部  
心は憤りて、上古  
かくいなうりし物  
をと思ふより、皇族  
の源氏の君といふ  
をまとうり、攝籙の  
頭中將といふを客  
とすし、そのより次

文章は経緯といふことあり。この物詠の経を  
論るは源氏の君をめれど、藤壺の中宮、紫の上  
まこと致仕太政大臣など、皆経の并に伴るをれ  
て足ゆ。これをも布に譬へていへば、藍縷を糸  
の添ひあるもの如し。さき宇治の巻よりて、  
彼の薰大将と白兵部卿あるを、是より添ふゆの  
ハ、八雲姫君たち、明名中宮の御子、六條院の御  
子なり。さき廣道ハ一世源氏を光といふ。其縁  
詠もて、薰と白との名をつけぬ。又藤壺を赫  
日宮といふも、源氏を光といふに對へたる縁

一号五

才といふくみ  
作られたる帝の  
日本紀をよくくみ  
女よとのまはる  
ことハ、深きみん  
ありしるべき  
為章が七篇も、高  
尚が日本紀御局考  
らも、これよ及ぶぬ  
ハ、いと遺憾なるこ  
とよこを云云。  
又云、後宮職員令よ  
妃は四品以上、夫人  
は三位以上、嬪は五  
位以上とあり、妃ハ  
内親王よて、夫人も  
臣族の貴女、嬪ハ臣  
族の内よて、や、位  
車き女なり、故に妃  
夫人嬪共よこを御

語する。又紫の上といふも、藤壺の姪よ當りた  
まへば、藤の色をとめて紫といふなり。云々  
その他も、種くいとぬたるハ、存もあるもあ  
るべし。けさど。文法よ用るけれども、以上ハ  
全篇よ距りていふおの経る也。一段づつ、此上  
よていへば、才一大段のめきハ、桐壺の帝も又  
経る也。次にいふ緯も、これよあはれど。  
緯も或ハ名をあはれし。或ハ名を著るも、さきど  
も。此巻中の帝よ仕へたる。月御雲客、及び源氏  
薰白宮等よ使も、人ハ、皆緯なり。これ

源氏物語講義

ふりて

六

妻ありども、三宮の  
分ちあり、されど妃  
を皇后とまべきは、  
光明子を聖武の皇  
后とまざるは、淡海  
公の權威故なり、然  
まども妃といひ、夫  
人といふ時は、尊卑  
ある故よ、つひまき  
らひて女御と改め  
嬪を更衣とせり、後  
壺の女御を弘徽殿  
より先、皇后とま  
たるは、是又式部の  
差氏を貶せる一証  
とまべし。

を更よふれての。人々の喜怒哀樂の情態より。  
時よつけしもの四時の景色が加つて。人世の盛  
衰変遷のさまが取り容して。摸し出したる草の  
多らみ。げに絶世の一大名文よし。いと知れ  
たしともめでたき上手の書ぎまなり。さそまこ  
眼目要領照應對句伏線省年等ハ。皆その巻く  
くおひそひふべし。

段落

諸らぬよりハ全篇の大段落をいそん。比文  
章ハ年代五十餘年間のころを五十四帖よ書

一 号 六

織の布帛よ反匹あ  
るがぬ。又節を竹  
竿の節のさよて即  
小段中の亦の小段  
落をいふ。故よ  
あゆめ、語句節段  
と別ちぬ。譬へむ左  
の如し。

いづきの語おんとき  
よの語、女御語更  
衣語あまの語さふ  
らひ強ひたる中よ  
語、いと語やんごと  
なき語、さほしあ  
ぬの語、まぐれ、語  
ときめき強ひありけ  
る語、以上一節とす  
るの類なり、以下皆  
比例よ倣ふべし。

綴りたれど源氏の君も雲隱の巻、薨去志願  
つご。雲隱まを四よ區別して四大段とす。字  
治十帖を志をらく一大段とす。即ち合せて五  
大段とす。さる第一大段も。是を桐壺帝の御宇  
とす。一の卷桐壺よ。八の卷花宴よ。いづる。凡  
十九年間のことと記する。第二大段も。是を朱  
雀院の御宇とす。九の卷葵よ。十四の卷渡標  
よ。いづる。凡八年間のことと記する。第三大段  
も。是を冷泉院の御宇とす。十七の卷繪合よ。あ  
る。三十四の卷若菜上よ。いづる。凡十三年間のこ

源氏物語講義

だむら久

七

きども自らの長短  
あれを、或ハ二三  
句を以て、一節と  
たるもあやむと  
べし。  
さて本文は、全部  
十四帖を、五大段  
區別せしむ。全部  
よふか、大體を定  
むるハ、大段より  
ハ大段のうち更  
又數十の大小段  
あり、仮令ハ桐壺  
の一卷を、四大段、十  
小段、四十節、區別  
したるが如し、これ  
初學をして、容易  
文法をささぐあめ  
んとおもへるなり、

省筆

と成るるは、第四大段也。是を今上帝の御宇と  
し。三十四の卷若菜下より。四十一の卷雲隱  
いづる。凡八年間のこと成るるは、第五大段也。  
是を宇治十帖とし。四十五の卷橋姫より。五十  
四の卷夢浮橋といづる。凡十年間のこと成る  
るは、まづおのく五大段は區別するは、一  
ごとよその概略をいさづ左の如し。

第一大段

此段も源氏の君いと年若く所坐し、志き  
ましく御忍び歩きたるど志のふと。人皆うらみきと

一号七

文章の上は省筆と  
いふことあり、是ハ  
又、ごしと詞を省きて、  
文意を深めしめ、  
又、ごしとことと  
おぼめうさんと  
る処など、用ゐる  
格なり、比物語の中  
よ、年月を省ける  
ところあるは、さる  
るも、ごし、さて年  
を省きたるハ諸説  
よ、いへるの如く、必  
源氏の君りめ、い  
も省きたるも、其  
相壺と帚木の間に、  
源氏の父の年立、十  
三歳より十六歳ま  
での四年を省き、花

きハ。血氣盛するがゆゑに。この身も若く盛な  
るさま成叙べあるなり。されど、榮枯も自然の  
理なり。あれども榮のものありて。枯るべき能はるは。比  
段よ於て。源氏の君の光榮のさま成。かき知し  
あるも。次の段といへる。也。引くよあはき  
の出来る伏案を志めせるものなる。さるハ花  
宴の巻よ。弘徽殿の御妹。朧月夜の所この起  
まるとい。源氏の君のうら。よ。つ。ぬことこのい  
くる始めなり。は内桐壺の巻也。本傳の如きも  
のよして。帚木巻の雨夜の物語の段也。大序也

宴と葵との間も御代よりより源氏の廿一歳一年を省き、關屋と繪合との間も御代の御代よりより源氏の三十歳一年を省き、若菜下よりより源氏の四十歳一年を省き、うちのみうど御位よつとせ、十八年よりより源氏の四十二歳より四十五歳に至る四年を省きたり、又雲隱の巻の中より、大弼の年齢六七八九十一、二十三歳より、九八年間を省けり、御代より死

うの間の省き。此桐壺と帚木との間も。源氏の五のう。十三十四十五と三年間を省きたるは、けとも卷よりいふべし。

第二大段

此段も葵巻より御代替りて、弘徽殿方の御勢つよくなる。漸くもしたる事のためきて、終り須廣の御うつろひ有けるは、暫時源氏の君衰へさせ給ふさうなるほど、衰ハ榮よ還らざるごとく能くは、終り事とけり。都へ海を給ふごとく、遷標の巻よ志るごとく、榮の緒を伏案よ置た

亡志多し、人々ハ、朱雀院致仕太政大臣、髭黒太政大臣、螢兵部、紫上の父式部、ハ、玉小櫛、源氏評叙、るど、参考して知るべし。

准據

此物語の帝王を、何院ハ何天皇と准むるど、種々の説あれど、強て何院ハ必だ何天皇と准ぶたるるべし、と論断するも、及むば、桐壺の帝ハ、則ち桐壺の巻の帝と見てあるべき事なるべし。

是。此花宴と葵の間も。一年省きたるは、桐壺帝ありて、みさせ給ひて、朱雀院御即位ありて、御代の替りぬる水ざる也。その次の遷標と繪合卷の間も、おれど、此内葵巻よあひの上うせ給ひ、賢木巻よ桐壺院崩御し給へるも、皆源氏の君の御衰の種子となる哉、又もいふべし。

第三大段

此段ハ冷泉院の御代とありて、源氏の父の御威勢もなごびるくなりて、何事も御心のまゝなるも、藤末葉巻より、上りて、太上天皇と准へ

あつれも一通り云ふべし。  
 桐壺帝  
 是帝ハ醍醐天皇ノ准ビト旧注トモにワケルハ當キリ、彼ノ亭子院ノ長恨哥ノ清屏風ト宇多ノ清イサメトあるニ因テいふハ尤モあるべし。岷江入楚日本紀局考ニ桓武ニ准ビテの説ハ、取ルニ足ラズ。  
 朱雀院  
 此院ハ朱雀院ニ准トタルヤウナリ。朱雀ハ醍醐ノ弟十一子、村上ハ弟十四子トテ、清兄弟ノキミ

らゆて。六條の院へ行幸のことあるも。此の君の清繁の極を書き尽せるふる也。さてこの段よて源氏の君らよるき紫花を極めむは侍れむ。次よまことよるきあり。と或来はべき。其端緒ハ若菜の下巻の末なる紫上の御悩の條ニ伏案せしめた也。  
 第四大段  
 此段も清代ありと名をたす。さて女三の宮のものよまぎれの御こと起り。ハ。六條院のみ心を悩し給ふひとりつるよ。紫上御病重

一 号九

結く似たり。湖月抄より、村上ニ准ビトあり、入楚と局考ニハ、平城ニ准ビトあり、何きも取らば、冷泉院。此院ハ村上ニ准ビト旧注ニあるハ、當キリ。局考ニハ仁明ニ准ビト入楚ニハ淳和ニ准ビトあり、取らば、今上帝。是帝ハ冷泉ニ准ビトあり、やうなり。旧注ニ仁明ニ准ビト云ハ、桐壺帝を桓武ニ准ビテより起まる。説するん、あつれを取らば、

らせ給ひて。つひは法巻よせうせぬハ。是六條院生涯の御さげきよして。幻巻も所歎きのことのみたまを。さてはいみじき御歎きこと。六條院のつひよかくれさせ給ふべきこと。のわとるめ。となん人あれも思ふ屋けき。とざと雲隠巻のこと。紫ハもあきたるを。  
 第五大段  
 此段も薰大将の年立を追て志るさゆたる。一大段なり。この他第二大段の尾の蓬生關屋ハ。末摘花と空蟬との終る御むむ。第三大段の

源氏物語講義

だむら久

十

光源氏  
 は君ハ高明ニ准ド  
 たるなるべし。さき  
 高明公ハ醍醐天皇  
 の皇子なるをむるを  
 或ハ嵯峨天皇ニ准  
 ト。或ハ西三條右大  
 臣光公ニ准るる旧  
 説ハ皆取らざるな  
 り。高明公ハ西宮左  
 大臣高明といひて  
 安和二年太宰帥ニ  
 左遷せしれ強へる  
 清母を更衣周子な  
 れば能く當れりや  
 うる也。

尾の柏木横笛鈴虫夕霧の四巻ハ。柏木と女三  
 の巻と夕霧と落葉の巻。さきどのことこのことなり。  
 又第四大段の尾の白雪紅梅竹川の三巻ハ。白  
 兵部々と紅梅右大臣と紫黒右大臣とのこと  
 成あげたり。是らハ皆その大段の附録のめき  
 ものとえり。さきど小段を別つときハ。是  
 らもうつぐ段節を奉ていふべし。

